

氏名	岩崎 幸恵
学位の種類	博士（看護学）
学位記の番号	甲第 165 号
学位授与年月日	令和 2 年 3 月 3 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文の題目	標準体型及び肥満体型高齢者の頭部挙上角度の違いからみた 仙骨部・臀部血流量の比較
論文審査委員	主査 川端 京子 副査 久米 弥寿子 副査 阿曾 洋子

論文審査並びに最終試験の要旨

本論文は、65 歳から 76 歳のシルバー人材センターに登録している標準体型及び肥満体型の女性高齢者を対象に、頭部挙上 20 度、25 度、30 度の角度の違いが仙骨部・臀部血流量にどのような影響があるかを明らかにすることを目的に実験を行った。

第 1 研究は、標準体型高齢者を対象に、第 2 研究では肥満体型高齢者を対象にデータを収集したものであり、実験方法、収集データは第 1 研究、第 2 研究ともに同様である。

実験は、武庫川女子大学看護学部人工気象室において、身長、体重、腹囲、体脂肪率、血流量を測定した。なお、血流量は、仙骨部・臀部・左右臀部の計 4 カ所を測定した。測定は、5 分間の半背臥位の後、30 分間の頭部挙上 20 度、その後 15 分間の圧迫開放後に、30 分間の頭部挙上 25 度、その後 15 分間の圧迫開放後に、30 分間の頭部挙上 30 度、その後 15 分間の圧迫開放という手順で実施した。

分析は、仙骨部・臀部については、初回半背臥位の血流量 5 分間の積分値をベースライン血流量とした。また、頭部挙上 20 度、25 度、30 度時のそれぞれ 30 分間血流量は、10 分ごとに区分し、その区間について、中央値と積分値を算出した。各血流量の時間経過については、Friedman 検定にて比較し、Bonferroni にて補正した。また、有意水準は 5%未満とした。

本研究は武庫川女子大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認 No. 14-44）。

結果及び考察は、標準体型高齢者 17 名では、頭部挙上 20 度の場合、仙骨部・臀部ともに血流量の増減に有意差はなかったが、頭部挙上 25 度では臀部においてベースライン血流量と測定 30 分後の血流量に有意な増加があった。また、頭部挙上 30 度で

は、臀部においてはベースライン血流量と測定 30 分後の血流量との間に、頭部挙上 20 度時よりも有意な血流量の増加がみられており、うっ滞状態を示していると考えられる。

つぎに、肥満型高齢者 14 名では、頭部挙上 20 度の場合は仙骨部・臀部ともに血流量の減少はみられなかった。頭部挙上 25 度では標準体型と同様に臀部において、ベースライン血流量から 30 分後の血流量に、積分値が 1.0 以上の有意な血流量の増加を示していた。しかし、仙骨部や臀裂部、右臀部において、測定 10 分後から 20 分後にかけて有意差はなかったものの、血流量の減少が認められており、うっ滞状態から阻血状態への移行が見え始めていたのではないかと考えられる。また、頭部挙上 30 度では他の角度に比べ、特に臀部において、ベースライン血流量が倍程度に有意に増加しており、うっ滞の程度も大きく、有意差はみられなかったが、測定後 10 分後から 20 分後、30 分後と経時間的な血流量の減少もみられ、うっ滞状態から阻血状態へ移行し、阻血状態が進行していた状況が示された。

以上のことから、標準体型高齢者については頭部挙上 25 度以下が、標準体型高齢者では頭部挙上 20 度以下が望ましいことが示唆された。

本論文は、高齢者の褥瘡予防の観点から体型別に適切な頭部挙上角度を仙骨部・臀部血流量から検証したものであり、体型別に検証した研究は既存の研究では見当たらないところであり、本研究は新知見となる。今後は、更に体圧との関係も含めて強固なエビデンスとなる研究の展開を望むところである。

以上のことから、博士の学位取得にふさわしい論文としての価値があると考えられる。